

あつて宿を逃げました。が、追手がきびしくとても逃げきれませんでしたので、いっそ死んでしようど……それにしても里の父親がかわいそうでなりません。年貢のかわりにわたしを売って、売った代金を追いはぎに盗られ、その追いはぎの親分が、人もあろうに花見屋の大番頭とは……」

「ねえさん、心配しなさんなあ。わたしがあと引き受けやした。私の背中におぶさんなあ、しつかり肩につかまって振り落されぬようにツメをたててしがみつきな」

「申し訳もございません」

「お礼を聞くなら長沼町で、今夜はこれから月とおいらとどっちが勝つか、間道を通って石川に出る。それから後は風まかせ、明日の夜はおいらが納屋のワラふとんでゆっくり眠ってくんなんしょう」と言いながら、ねえさんを軽々と背負って月の夜道を一散走り、その速いこと、速いこと。一生一代、甚造兵衛が男をかけたいた天走り「あらはずかしい、甚造兵衛さん、あたしのだて巻きが解きました。とめて下さい。しめなおします」

「帯は夜中に解けるもの、ちよつともはずかしくも、おかしくもありません。ただだて巻きを落さぬように端をしつかり持つて下さんしょう」

「追われる体だ。一刻も早く安全地帯に逃げきりやしょう。それまでねえさんがまんしてくんなあ」

「すみません。すみません」背中でわびるねえさんの、それも美しいねえさんの声を聞いてはたまらない。甚造兵衛の力がわく。速さは一段と加速度を増す。ねえさんのだて巻きが、ヒラヒラと風になびく、二丈八尺の赤いだて巻きのはしが地面につかずに波を打ったと云う。



(跡見塚古墳群全景)